



千年もの昔、栄華を極めた藤原家の時代が終わると、
衰微してしまった雲洞庵。

ここで、いよいよ関東官領、上杉憲実公が登場します。

鎌倉から京都に本当の主権が移って、その京都から関東管領職を任命された、
上杉憲実公が雲洞庵を再興しました。
今から約 600 年前の事です。

上杉憲実と聞いて「おや？」と思った方もいるかもしれません。
栃木県にある「足利学校」の中興の祖です。

足利学校は日本最古の学校。国の指定史跡です。
かの有名なフランシスコ・ザビエルによって
「日本国中、最も大にして最も有名な坂東の大学」
と世界に紹介され、
「学徒三千」と記録される程の盛況を呈しました。
当時最高レベルの大学校です。
その最高学府に、雲洞庵から僧侶が留学して、首席で卒業した人がいます。
直江兼続公の主君である、上杉景勝公の叔父さん、
後に、十三世方丈となる秀才「通天存達」です。
通天は、雲洞庵の伝説にもなっている傑僧、十世方丈

「北高全祝」の高弟で、北高の薦めで足利学校に進みました。

足利学校での教育の中心は儒学でしたが、
通天は四書五経の教養と易学、兵学の軍法や戦路、
さらに、医学や帝王学も学んだといわれています。

通天は、甥の景勝と兼続に、
「人の上に立つ良き指導者」となるための最高の学問を伝授し、
特に人間形成の基礎学問をみっちり教えました。

二人は、都からほど遠い、この山々に囲まれた田舎に居ながらも、
当時一流の教育を受ける事ができたのです。

この格式高き修行の寺「雲洞庵」で、
立派な指導者達から意思と学問を学び
日々の厳しい禅の修行は、二人にとって
それはそれは辛かったことでしょう……。

「わしは、こんなとこ来と一はなかった」
と言うのもなげます。

名僧、傑僧達の教えが、
上杉謙信の「敵に塩を送る」行動や
上杉景勝の寡黙の中に「強い精神力や信頼」を養成し
直江兼続の「愛」を生みました。
戦国の乱世を生き抜く強い精神力や頭脳は
幼い頃の厳しい雲洞庵の修行で培われたのでしょうね。

あ、そうそう「雲洞庵の土踏んだか」の意味でしたね。

この越後の地には昔から
「雲洞庵の土踏んだか、関興庵の味噌なめたか」
という言葉があります。

二つの意味があるのですが、
そのうちの一つをご紹介します。

それは、当時諸国の修行者は、この雪国の二大禅道場で
曹洞宗と臨済宗の「神」を学ばねば一人前の禅僧とは言わぬとされており、
修行者同志が会った時に、互いに交わす問答言葉だったと伝えられています。

例えば...

「おぬし、どこで修行を積んだ？」

今風に言うと、「君はどこの大学を出たんだい？」

「雲洞庵の土を4年ほど踏んできました」とか

「関興庵の味噌を4年もなめております」...

今風に言うと、「超一流大学卒業です」

みたいな...(笑)

当時、雪深い極寒の雲洞庵で、禅の修行をしていた

雲水の数は200人以上もいたと言われている。

本当に雲洞庵は越後一の禅寺だったんですよ。

「与六、雲洞庵の土踏んだか？」

「踏んだ。じゃが、母上が恋しくて泣いてばかりいた」

「わしはほんといきにいと一なかつたんじゃ」

「与六、よく頑張ったね...。」